

## 悪魔の証明

「――なあ、悪魔って信じるか？」

そう唐突に聞かれ、俺は困惑から言葉を失った。

T 高校二年三組、放課後の教室、ざわざわと騒がしいその空間はまだ随分と明るい、既にクラスメイト達の殆どは帰宅の準備を始めている。

今日は水曜日、市教研で多くの教師が学校を空ける為、授業も五限までしかないからだ。

俺の場合は元々部活に所属していない為早々に帰ろうとしていたのだが、そこにいきなりこの質問である。

問い掛けてきた生徒は真っ直ぐ俺の目を見ており、どうやら他の誰かに話し掛けた訳でもなさそう。

まあ、そもそも目の前の男が俺以外の誰かと話している場面を見た事はないし、想像も出来ないのだが。

「……いや、何だよそれ。いきなりどうしたんだよ、佐伯」

何の脈絡も無く問い掛けてきた男の名前は佐伯と言ひ、いつも口数少なく、クラスでは浮いている訳でもなく、かといって馴染んでいる訳でもない、取り立てて挙げる特徴のない平凡な生徒である。

そんな微妙な生徒である所の佐伯だが、どういう訳か俺とだけは話すばかりか、積極的に交流を図ろうとしてくるのだ。

昼休みや放課後にまるで社交的なクラスメイトのように、仲の良い友人のように。

生憎とこちらは別に佐伯の事を友人だなどと考えた事も無いのだが、俺もそう友人が多い方ではない為、話し相手として付き合っていた。

ちなみに、俺は佐伯の下の名前すら知らない。

「別にどうってことはねえよ？ただ落木の意見が聞きたくてさ」

「いつものどうでもいい質問なら答えないぞ。今日はすぐ帰りたいし」

「まあ待てって。今日のオレは一味違うぜ？いーから答えてくれって。さあ、どっちだ」

「ちなみにお前はどなんだよ」

「オレか？居るね、間違いなく」

「なら俺も居るに一票。これでこの話は終わりな」

「ちょいちょいちょい！！そりゃねえだろ！いくらオレでも適当言ってる事くらい分かるんだぜ？ちゃんと答えてくれよ～」

肩を掴んできてがくがくと揺らし、縋るように声を上げる。

この佐伯という男は、時折こうなるから面倒臭いのだ。

根本的に構ってちゃんというべきか、だる絡みをしてるのが厄介な点で、しかも質の悪い事に放置するとさらに面倒になる。

俺は溜息を一つ、仕方無しに付き合おうと決めた。

「……そもそも信じてない。宗教も神話も概念としては面白いけど結局の所作り物だろ。信じているか、実在しているかって問なら否だな」

今回は随分といきなりだったが、佐伯がこの手の質問をしてくる事自体はそう珍しい事では無い。

そもそも佐伯はオカルト好きであり、高校でこいつと話す内容といえば授業とオカルトの事くらいなのだ。

勉強ではそこそこ頼りになるし、その手の話にも興味が無いではない。

この手の議論も嫌いではない。

「なるほどなるほど、落木の意見は分かった。まあ質問はひとまず置いておいて、オレは居ると思うぜ。根拠として、中世の西洋の文献を見れば、悪魔を見たって話はごまんと出てくる。悪魔憑きに悪魔祓い、悪魔の存在がなきゃ説明のつかない事件だってある。火の無い所に煙は立たないって言うだろ？悪魔ってのは実在するやつなのさ」

気が付けば火の気配の捌けた教室で、佐伯が前の席の椅子に逆向きに座る。

どうやら本腰を入れて議論をする心積もりのようだ。

「悪魔憑きとか悪魔祓いの話をするならそれこそ作り物だ。前にも言ったと思うが、神も神話も宗教も、人にとって都合の良い作り物だと俺は考えてる。宗教ってのはつまる所、これだけ良い事をしたんだから報われるに違いない、っていう因果応報の担保作りだ。人間ってのは目標とかゴールが無いと不安になる。天国って名の希望が欲しいんだよ。最初は崇高な祈りから始まったんだとしても、次第に宗教は説く側にとって便利で都合の良いものになっていったんだろう。都合の悪い思想を隠して、邪魔な人間を排除する、魔女狩りとか悪魔憑きが正にそれだろ」

「確かに人間にとって都合の良いものになっていったのは否定しねえ。けどだからって始まりまで作られた物って決めつけるのはちょっと暴論じゃねえか？最初の目的とは違う用途で使われる、なんてそれこそよくある話じゃねえか。例えばナイフだって本来は調理の道具だが、使い方次第じゃ武器にだってなる。宗教だってそうさ、始まりが嘘だって証明出来ない限り、全部の完璧な否定って出来ないと思うぜ？」

佐伯は身振り手振りを交えながらそう語り、何かに取り憑かれたように熱を帯びていた。

俺はと言えば、考える振りをしながら溜息交じりに目を逸らす。

正直、こういうやり取りをするのは嫌いじゃない、嫌いじゃないが、時折、佐伯の言葉には妙な圧が感じられる。

熱量だけの話ではなく、まるで"知っている"人間のような、確信に満ちた響きがあるのだ。

「よし、それじゃあ今度は落木の番な。悪魔が存在しないっていう根拠を教えてくれよ」

「いやお前、それは完全に『悪魔の証明』だろ……」

「はい？悪魔の証明？オレが言ってんのは存在しないって根拠だぜ？」

俺は呆れた顔で頭を掻きながら、佐伯の間抜けな顔を見た。

こいつは時々、わざとなのか本気で分かっていないのか判断の付かない事を言う。

「『悪魔の証明』っていうのは、存在しない事を証明するのは基本的に不可能だって話だよ。Aが存在する事を証明しようと思えば、その物自体、つまりAを持って来ればいいだけだろ？けどAが存在しない事を証明する為には、世界中の全地点でAが無い事実を証明して回らないといけない。そんなの実質不可能だ。それが悪魔の証明。俺はお前に反論は出来ても、自分で非存在を証明する事は出来ないって訳だよ」

「へえー……」

佐伯はやけに感心したような声を上げて、ふむふむと頷きながら腕を組んだ。

……絶対分かってないだろ。

「……まあ、落木の言いたい事は分かった。存在しない事の証明は無理、そういう事だよな。けどよ、そうなると今回の場合、オレの方が有利だって事になるんじゃないか？」

「……いやまあ、一応そういう事にはなるな。お前は証拠を持って来ればそれでいい訳だから、有利ではある。理論上な」

会心の笑みを浮かべながら佐伯が問うが、この男は本当に分かって言っているのだろうか。  
この場合存在証明をするという事は、本物の悪魔を連れてくる事に他ならないのだと。

「そういう事なら話は早え。実はさ……」

ふと、佐伯が声のトーンを落とした。

「——オレ、悪魔に会った事あんだよ」

—————

いつもの駅でドアが閉まり、電車がゆっくりと加速を始める。  
既に太陽は橙色に染まり、斜陽が世界を焼いている。  
佐伯と議論を続けていた俺は、話の流れでその証拠を確認する為に寄り道をしていた。  
隣の席に座る佐伯は、今も自信に満ちた笑みを浮かべて窓の外の景色を眺めている。

「お前、悪魔の像なんて本当に実在するんだろうな。もし嘘だったら……」

「大丈夫だって。オレ落木に嘘なんてついた事ねえだろ？もし嘘だったらメシでもなんでも奢るから、な？」

いつもは少し突けばボロを出す佐伯だが、今回ばかりは相当な自信があるのか余裕の態度を崩す素振りが無い。

——俺は今、佐伯に言われるがまま、悪魔に会えるという場所まで電車で向かっていた。

勿論俺は全く信じておらず、悪魔に会えるなどと本気で考えて付いて来た訳ではないが、それでも来たのは家に帰っても仲の悪い両親が居るばかりで、気まずく感じられたからだ。

それに半ば勝負のような形になった悪魔の存在証明だが、分の悪い勝負だとは思っていない……どころか、

普通に考えて負ける訳が無いだろう。

佐伯が何を見せようとしているのかは定かでは無いが、それがどのようなものであれ、俺の価値は揺るがない。

精々美味しい飯を奢ってもらう事にしよう。

「お、この駅だ。降りるぜ」

電車が減速したタイミングで佐伯に言われ、共に S 駅で降りた。  
ここからは徒歩で目的地を目指すらしい。

「お前が言ってた場所って思ったより近かったんだな」

「そうかぁ？学校からは結構距離があっただろ？」

「いや、俺この一つ先が最寄り駅なんだが、S 駅も自転車で来れるくらいの距離なんだよ」

「へえ、落木って家ここらへんなのか。じゃあ結構な遠距離通学なんだなぁ。初めて知ったわ」

「初めて言ったからな。別にこれまでに話す機会も無かったし」

「違いねえ。オレらは話すってより議論のが近いもんな。そりゃ世間話とか雑談なんてしようもないってもんだ」

「そういう事だ」

話している内に件の場所へと到着した。

大体十分くらいは歩いただろうか、そろそろ話題も尽きかけて気まづくなっていた所だったので助かった。

——そこは街を一望出来る丘のような場所だった。

テニスコートくらいの広さ、中央には大きな木が濃い緑の葉を生い茂らせていて、その中で蝉が盛大に合唱を行っている。

随分と五月蠅かったが、彼らも寿命が一週間しかないのだから精々自由に鳴かせてやるとしよう……いや、ものによっては一か月かそこら生きるのだったか。

そんな事はどうでもいい、本題はその蝉が鳴く大木の根元に鎮座する、一基の祠だった。

古びている、苔むしている、そんな特徴を挙げる事は出来たが、これといったモノは感じない。

ある所にはあるだろうという、特に珍しくもなんともない祠だった。

「おい、これがお前の言う悪魔なのか？」

「おう。間違いねえよ」

「別に悪魔とかそういう感じは一切しないんだが」

「そりゃそうだろう。神社とか寺だって全部が全部神様神様してる訳じゃあねえだろ？悪魔だってそんなもんさ」

「そんなもんか。一応見てみても良いか？」

「いいぜ。って言っても別にオレが許可出すもんでもないんだがな」

俺は一人、祠とその周囲を見て回る。

初見の印象と同様、特筆すべき特徴や感想は無いように思えた。

大木は樹齢数百年はありそうで、その幹は俺が両手を広げても抱えきれない程だ。

祠の方はちょっと分からないが、それなりに歴史があるように見える。

前面には何か文字が刻まれていた痕跡もあるが、既に風化してしまって判読不可。

周囲には落ちないよう柵が打ち立てられていて、それ以外には何も無い。

ものの数分で俺なりの調査は終了した。

全体を見て改めての感想としては、そう……

「普通だ」

「何だそりゃ。つまんねえ感想だなあ」

「だったらここがつまらないんだろ。こんな場所今日どこにでもあるぞ」

「ま、確かに印象って点では弱いかもしれねえな。今時有名どころの寺社仏閣でも SNS を使った宣伝やら映えスポットなんかを用意してる時代だ。オレとしてはありがたみも何もあったもんじゃないと思うが……まあ見た目が普通ってのは甘んじて受け入れようじゃねえか」

腕を組み、俺の文句を真正面から受け止める佐伯。

一見諦めたのかとも取れる仕草と発言だが、その表情はまだ自信を宿しているように見える。

まだ隠し玉があるのか。

「本命はこの悪魔の能力とご利益——ずばり願いを叶えてくれるのさ！」

「願い、ねえ……」

胡散臭いと思った。

この手の願いが叶う事というのは基本的に極々低確率な話だ。

よくご利益や願いが叶ったと話題になる寺社仏閣があるが、そういうのは大抵後知恵バイアスやストーリーバイアスなど、人の思い込みによる部分が多い。

具体例で言えば、神社に参拝に行った後に宝くじが当たったとして、それをご利益に違いないと考えてしまうといった具合だ。

別にどう思うかは当人の自由だと思うし否定はしないが、それを押し付けられるとなると話は別である。

願いを叶えてくれるなどと言われても、到底信じられるものではない。

しかし今回の場合元から半信半疑で来たのだし、もし外れても一食分の食費が浮くのだから損は無い。

当たろうが当たらないが俺に不利益は無いという訳だ。

「分かった。取り敢えずお祈りしてみよう。何か作法とかはあるのか？」

「うんにゃ。祠の前で手を合わせて祈ればそれで良いだろ。こういうので大事なものは作法じゃなくて心の方だって」

まるで自分が管理人かのようにしたり顔で解説する佐伯。

俺が聞いた事なので口には出さないが。

ともあれ謎のお許しも出たので、俺は祠の前にしゃがみ込んで祈る事にした。

佐伯に言われた通りそこに作法は無く、音も立てずに手を合わせて目を瞑り、後は祈るだけだ。

とはいえ願い、願いと来たか。

俺は人並みに願望というものを持ち合わせている方だと自分では思っているが、どうにも何かに祈ったり願ったりという行為と相性が悪いようなのだ。

仮に願いが成就したとして、最後までそれが叶えて貰ったものであるという実感が無いからだろうか。

だから初詣に行っても神様に昨年の感謝と今年の挨拶を伝えるだけ（本来の初詣はこれが正しく、願いを叶えて貰う場ではない）で、何かを願って祈った覚えが無い。

故に祈りと言われて何にしようかと暫くの間悩んだのだが、結局、

——平和に平穩に暮らせますように。

という面白味も何もあったものではない、無難なものにしておいた。

自分の努力の領分には無いが、さりとして相手に然程の負担を強いない、このくらいのささやかな願い事で良いのだ。

最後に再度頭を下げ、俺はゆっくりと立ち上がる。

「随分掛かったな」

「願い事が思い浮かばなくてな」

「おいおい、今時そんな人間居んのかよ」

「少なくともお前の目の前にはな」

「聖人気取りかよ」

「言ってろ」

それから俺と佐伯は駅付近で別れて帰宅する事になった。

俺は S 駅から徒歩でも帰れる距離だったし、こう言ってはなんだがこれ以上一緒にいても会話の無い時間が続いて気まずい思いをする事が分かっていたからというものもある。

まあ無駄なりソースを使いたくないという考えが半分、早く帰ってシャワーを浴びたかったのが半分だ。

そうして夕日も空の向こうに微かに見える頃、俺は家に帰って来た。

「……………」

鍵を開けて入り、後ろ手にドアを閉めて施錠する。

ただいまは言わない、言っても返事が無いどころか、余計な厄介事に化けかねない。

極力足音を立てないように二階に上がり、早々に自室へと引き上げる。

時間的に両親共帰っている時間帯、部屋の外に出て何かをする事も憚られた。

ゲーミングチェアに座り、耳障りな喧嘩の音が万が一にも聞こえてこないようにヘッドホンを装着し、パソコンの電源に手を伸ばす。

夜が更ける。



「……………」

日付も変わり、とうに寝静まった家のキッチンで冷蔵庫を開く。

ラップの張られた皿には焼きそばが盛られていたので、それを取り出して電子レンジへと放り込む。

チンと音が鳴り、火傷しそうになりながら皿からラップを剥がす。

水滴の付いたそれを捨てようとゴミ箱を覗けば、割れた皿がビニール袋の中に入れられて捨てられていた。

「……………」

大方母が投げて割れたのだろう、一体何枚皿が割れれば気が済むのか。

お菊さんがこの惨状を見たら泣いてしまう、とは少しばかり気楽が過ぎるだろうか。

とはいえ思考の中でも冗談を言わなければ、真正面から受け止めるには現実が悲惨過ぎる。

俺は溜息を吐きつつ、濡れたラップをゴミ箱に叩きつけた。

—————

祠に祈ってから一週間が経った。

あれから特段変わった事は無く、それで佐伯を問い詰めてみたのだが、

「まあ待って。悪魔だって全能じゃないんだ。何を願ったかは知らねえけど、そうそう早く効果が表れる訳じゃねえだろうよ。気長に待ってくれや」

と、諫めるようにそう言われてしまった。

確かに俺が願ったのは平穏な日常で、それがどう表れたかと判断する材料は無い。

今になってもっと分かりやすい願いにしておけば良かったかという後悔が顔を覗かせるが、仕方が無い。

あの時は碌に願いも浮かばず、咄嗟に当たり障りの無い願い事が浮かんでしまったのだから。

そのせいで佐伯に奢って貰う約束が有耶無耶になりそうだったが、今となってはそれもどうでもいいかと思うようになっていた。

佐伯も売り言葉に買い言葉であんな事を言ったのだろう、ここは軽く水に流してやるべきだ。

これは別に善人面がしたかったという訳ではなく、元々無理のある話だったのだと考え直したからだ。

——そも悪魔とは西洋の宗教における悪の象徴であり、人間を誘惑する、人が乗り越えるべきモノである。

神と敵対する立場にあるのであって、間違っても人の望みを叶えてくれるような便利な存在では無い。

世間ではよく悪魔に魂を売ったという言い方で、良くないものの力を借りて願いを叶えた事を悪し様に言う事があるが、悪魔というものは自身の利になる取引をされると言われている。

魂を代償とした取引などはその最たる例だが、他に有名なもので言うと猿の手だろうか。

猿の手とはイギリスのホラー小説に登場する使用者の願いを叶えてくれるもので、アラジンの魔法のランプにも似ているが、決定的に異なるのはその願いが歪んで叶えられるという点だ。

米を望めば水田と苗が用意され、金を望めば盗品が現れ、権力を望めば周囲の人間が没落する、それが猿の手である。

一説には猿の手は悪魔の手であるとも言われており、もしそれが事実であれば悪魔に願う事の愚かさを知る良い例だろう。

と、ここまで説明したものの、悪魔は西洋の概念である為、あのようになるまで祠が歴史を帯びるだけの時間は無かった筈なのだ。

悪魔云々というのもどこまで信憑性があったものか。

まあ、これも暇潰しが出来て良かったと思ひ出にしておこう。

「以上で今日のホームルームは終わりとする。もう帰っていいぞ」

教師の一声で空気が弛緩し、クラスメイトが一斉に立ち上がる。

皆それぞれ部活に向かったり帰路に就いたり、思い思いに放課後を過ごす。

俺は部活にも所属していないので、いつも通り帰宅部に交じって帰ろうと、そう思っていたのだが……

「お、落木クンじゃーん。ちょうどいいトコいんじゃーん」

鞆を持っていざ帰ろうとした所で、クラスメイトの陽キャに話し掛けられてしまった。

彼の後ろには友達だろうか、同じような髪型で同じような顔をした生徒が複数人。

陽キャは陽キャだ、いちいち名前なんて覚えてられない。

「あー……………おう。なんか用か？俺はもう帰るところなんだけど」

「いやオレ今日掃除当番なんだけどさー、落木クンちょい代わってくんねー？オレ今日バイトでさー」

ちなみに本校ではアルバイトは原則禁止で、特別な事情のある者だけが申請を受理される事で許可される制度になっている。

というのはあくまで建前で、よっぽどの事が無ければ罰則を受けず、それなりの数の生徒がバイトをしているのは公然の秘密となっているのだが、こいつは特にそれを隠そうともしていない。

人目を憚らず気の向くままに振る舞い、その結果誰が傷つこうとその場のノリだと笑って誤魔化す。

俺の嫌いな人種だ、当然そんな奴らの頼みなぞ聞いてやる筋合いは無い。

「まあ、別に良いけど……」

「あマジ？サンキュー。んじゃあとはオナシャス！」

そう言って陽キャ達はヘラヘラニヤニヤしながら颯爽と去って行った。

……ほら、こういう頼みを聞いてやるのも懐が深い証左っていうかさ、甲斐性っていうかさ。

別に決して断る勇気が無かったとか、陽キャの圧に吞まれたとかそういうのじゃないんだ。

ってか、気付いたら一人で掃除する事になったんだが。

「落木くん大丈夫？僕も手伝おうか？」

「え？」

今までのやり取りを見ていたのだろう、クラスメイトの一人が声を掛けてくれた。

名前はそう……忘れたが、確か隣の席の男子生徒だった筈だ。

何ともありがたい事だ、それだけに名前を忘れてしまったのが申し訳ない。

その後、心の中で俺に掃除を押し付けた陽キャを頭の中でボコボコにしたり、あいつらさえいなければと呪詛を吐いたりして精神を静めつつ、その男子と一緒に掃除を終えた。

夜食はラップに包まれたカレーだった。

なんて事の無い、日常の終わりだった。

最後の、日常だった。

—————

それから俺は、これまでの平凡で何の変哲も無い日常が嘘のような、摩訶不思議な体験をした。

引き延ばすのもなんだから、最初に結論から話そう。

俺に掃除を押し付けた生徒は、それから二度と学校に姿を現す事は無かった。  
最初はサボりだと思った。  
そいつは不真面目な生徒だったし、日頃からちよくちよく学校を休んでいた。  
だからまたかと、俺だけではない全員が思っていた事だろう。  
だが三日が経っても、五日が経っても、一週間以上経っても、彼が姿を見せる事は無かった。  
それどころか、彼の家族から捜索願が出た。  
あの時一緒に居た数人の生徒も、同じく姿を消していた。

「――――」

教卓に立った担任が、消えた生徒達を見た者は居ないか、何か怪しげな人物を見たという情報がないか、あれば担任が警察に情報提供をして欲しい旨を話している。  
しかし誰一人として消えた生徒達の行方を知る者は居ない、怪しげな人物など存在しない。  
きっと、もう二度と見つかる事は無いだろう。  
担任は最後に下校中は十分注意するよう言い渡し、授業は午前で終わりとなった。  
問い詰めなければならない、恐らく俺より詳しく事情を知るあいつを。  
視界に捉えた佐伯は今まさに教室を出ようとしていて、俺は急いで追おうと一步を踏み出そうとして――

「うおっ」

「わっ！」

丁度隣の席の男子とぶつかってしまった。  
この間消えた生徒に押し付けられた掃除を手伝ってくれた、親切な良い奴だ。  
しかし今は構っている暇が無い。

「悪い。けど急ぐんだ。またな」

「ちょっと待って、落木くん！」

強い言葉で呼び止められ、思わず足を止めて振り返る。  
隣の席の男子は、俺の事を心配そうな目で見ていた。

「落木くん大丈夫？井坂先生が話してる時、何か思いつめた表情してたけど……。もし何か悩ん

でたり知ってる事があって話しにくいなら、一緒に先生の所までついていくよ？何なら僕が代わりに話に行っても良いし！」

本当に、どこまでいってもこいつは良い奴だ。  
普通友達でもないクラスメイトの為にここまで出来ない、少なくとも俺はそうしないだろう。  
出来ない事を出来る奴は羨ましい……けれど、今は頼れない。

「いや、何でも無い。ただ、そう……家族が心配でな。今日は早く帰ろうと思っただけなんだ」

「あ、そうだったんだ！なんかごめんね？一人で勘違いしちゃって……」

「んや、ありがとな。心配してくれて。けど大丈夫だ。じゃあまた明日」

「帰り、気を付けてね！」

そんな声を後ろに聞いて、俺は駆け出した。  
佐伯が教室を出てからそう時間は経っていない、すぐに追い掛ければ捕まると考えて。  
しかし、佐伯は学校にも通学路にも駅にも、どこにも居なかった。

—————

収穫も無く、俺は自分の部屋で一人パソコンに向き合っていた。  
調べたワードは『日本 S市 悪魔』だったが、しかし悪神や悪霊の類は見つかれど、悪魔についての情報は無かった。

俺は既に、今回の行方不明事件が悪魔の仕業であると当たりを付けている。  
半ば願望が混じった可能性として家出や誘拐の線もあるが、今回の集団失踪事件、俺には一つ心当たりもあった。

あれは押し付けられた掃除をしていた時の事、俺は心の中で掃除を押し付けてきた生徒に消えて欲しいと願ったのだ。

無論本気で憎悪を以て願った訳では無い、あくまでストレス解消の為の益体の無い思考だった。  
だがもし、あの祠で願った『平和に平穏に暮らせますように』という望みを曲解し今回の結果になったのだとしたら。

確固たる証拠は無いし偶然かもしれない、あるのは漠然とした予感だけ。  
しかし一度考えてしまうと、何故だかもうそうとしか思えなくなってしまうのだ。

「とにかく、気を付けなとな」

佐伯は見つからなかった。

LINE と電話を幾度も掛けたが掴まらず、現状解決策は無い。

問題を解消出来ない以上、俺は思考に気を付けなければならない。

仮定を前提とするならばだが、下手に考え事をすれば取り返しの付かない事態になりかねないからだ。

なるべく考え事をしないように、俺はいつも通りにヘッドホンを装着し、ゲームを始めた。

大体二時間くらい経っただろうか、かなり調子も上がって来てここからという所で、突然に画面が真っ暗になった。

より正確に言うのであれば動かなくなったのは画面だけではなく、部屋の明かりやエアコンまでもが停止していた。

一瞬停電かとも思ったが、逢魔が時の窓の外では普段と同じ街灯が光っている。

ならば理由は一つ、ブレーカーが落ちたのだ。

大方母が電子レンジか湯沸かし器か、ドライヤーか掃除機か、組み合わせは知らないが同時に使いでもしたのだろう、以前にも同じような事はあった。

またすぐに戻るだろうと、俺はスマホを明かりにしながら待った。

「————っ！——————！！」

「ッ！————！——————！！」

下の階から聞くに堪えない怒号と罵倒が聞こえてくる。

またいつもの夫婦喧嘩という奴だ。

もっとも、あれ程険悪で破綻した関係性を夫婦と呼ぶのなら、だが。

ともあれこの夫婦喧嘩とももう五年以上の付き合いになる、今では先にブレーカーを上げてくれないかなと思うだけである。

「——！————っ！！——————！！」

「————ッ！——————ッ！！」

それにしても今日のは長い。

お互いストレスが溜まっていたのか、日頃の鬱憤全てをぶつけようとしているようだ。

そのあまりの大声に、この家の一員として近隣住民の皆々様には申し訳無い気持ちで一杯だ。

などと冗談交じりに嘆息していたが、時間が経つにつれふつふつと怒りが沸いて来て……

——これは駄目だと思った。

思考が良くない方向へと向かっている、自分で自分が制御出来ない。

このままでは先日の二の舞だ、何とか手を打たなければ。

そうだ、二人の良い所、楽しかった記憶を思い返すのだ。

俺の両親は、当然だが俺が生まれた時から仲が険悪だった訳ではない。

普通の、というものがどんなものか俺は見た事が無いが、世間一般で想像される普通の夫婦だった。

三人で食卓を囲み、一か月に一度は外出に赴き、たまの週末には家族揃って遊びに出掛ける。

馴れ初めについては詳しく聞く機会が無かったが、会社で出会ったとかのよくある話だった気がする。

だが俺が生まれるまでがよくある話だったのと同様、子供が出来たのを機に愛が冷めるというのもよくある話だろう。

「————！」

「————！！」

二人の時間が減って、育児という負担が増えて、お金だって厳しくなる。

ストレスが増え、結婚生活の長い時間が相手の欠点に気付かせ、すれ違いによる摩擦熱はやがて大火と化した。

昇華された炎は消火される事無く、今も尚家族を焼き続けている。

母はいつも父の悪口ばかり言っていて、たまに父が気まぐれの家族孝行をしてもあれが駄目これが駄目といちゃもんをつけていた。

口癖は「あの人みたいにはならないでよ」だったが安心して欲しい、俺は少なくともあんたみたいにはならない。

父は母と不仲になってから酒を飲んで帰って来る事が増え、暴力こそ振るわなかったが喧嘩になると誰が金を稼いでいると思っているんだなどと口走る人だった。

口癖は「母さんみたいにはなるな」だったが安心して欲しい、俺は少なくともあんたみたいにはならない。

「——！！」

「——！！」

……ああ、考えれば考える程に救えない、救えない。

狭量な母も、傲慢な父も、人としてどうしようもなく致命的に欠落している。

何故相手を認められない？何故自分の非を認められない？何故、こんなにも矮小で居られるのか。

少なくとも俺なら耐えられない、そんな自分を許容しておく事が出来ない。

憎んで、憎まれて、傷付けて、傷付けられて、愛を捨てて、愛を忘れて、業を積んで地獄に落ちる。

そんな結末はあんまりだ。

——だから、ここで終わらせてやるのも親孝行なんじゃないのか。

「……………は？」

俺は今、何を考えていたのか。

気が付けば、家の中は静寂を取り戻していた。

暗い部屋からは隣の家の明かりが良く見え、遠くからはカンカンと踏切の音が耳朶を叩く。

俺は独り、泣いた。

—————

——怒りで視界が真っ赤に染まっていた。

涙はとうに涸れ果てて、眦に残った最後のものも燃えるような嚇怒に蒸発した。

もう殆ど夜に傾いた夏空は、しかし未だ橙の光を残し、だらだらと流れる汗の不快な感触を無視して、俺はひたすらにペダルを漕ぎ続ける。

仇を、取らなければならない、恨みを晴らさなければ浮かばれない。

だってそうだろう、責任の所在は俺には無く、明確に罪を問われるべき悪が存在するのだから。

あいつはまるで俺から連絡が来るのを見越していたかのように、呼び出す LINE にタイムラグ無く既読を付けた。

今まで俺から送った連絡の一切合切を無視していたにも拘らず、だ。

そこで俺の中の推測は確信へと変わった——佐伯は一連の事情を全て知っている。

或いは事情には留まらず、人の身では知り得ないからくりについても知識を有しているのか。

だが最早、原理や原因などに興味は無い、これから行うのは復讐だ。

「……………」

そこは街を一望出来る丘のような場所だった。



テニスコートくらいの広さ、中央には大きな木が濃い緑の葉を生い茂らせていて、その中で蝉が盛大に合唱を行っている。

その根元、祠が鎮座する傍に、佐伯がこちらを向いて立っていた。

姿を視認した俺は自転車を乗り捨て、一直線に歩いて行く。

その口元が笑みで歪んでいるのを見て、噛み締められた奥歯がざりと鳴った。

「よお、落木。随分と早かったな。もうちょい掛かるかと思ってたぜ」

「————」

「全くこんな時間に呼び出しやがって。オレ以外の奴ならキレてるかそもそも来てねえぜ？ったく、感謝しろよな」

「————」

「何だよ怖い顔して。若い内からんな顔してると、年食った時に眉間に皺が寄るぜ？」

「————」

「返事くらいしろよなー。そんなんじゃ落木を教育した親御さんが泣いて……うおっ！」

「————ッ！」

激情のままに落木を押し倒し、抵抗されないように肩を膝で抑え込む。

こいつは分かっている、どうやってかは分からないが、全てを知っているのだ。

「説明しろ」

「説明って……いきなり言われたって何の事だか……」

「とぼけるな！あの祠が何なのか、お前は知ってる筈だろ！全部話せ！全部元に戻せえ！！」

「おお待て待て！待てって！分かった。分かったから一旦落ち着け、な？」

手足をじたばたと動かして抗議する佐伯だが、その口元は真剣さを欠いてニヤニヤとした笑み

の形を刻んでいて、それがまた俺を苛つかせる。

こいつは自分の立場を理解していないのか。

「ここは順番にいきましょう。まずはそう、あの祠についてだな。つっても前話した内容と殆ど変わんねえぞ？ありゃ悪魔を祀った祠だ」

「ここは日本だぞ。祠があんなに寂びるくらい前から悪魔なんて居る訳ないだろうが。あれは…いや、俺を何に祈らせた。何を隠してる」

「あのなあ、外の宗教が一体何百年前に渡来したと思ってるんだ。神の概念と一緒に持ち込まれて、何かの間違いで信仰されてたっておかしくねえだろ。何も隠しちゃいねえよ。それでも疑うってんならオレにゃ無理だわな」

「なんで、そんな遺物が残って……どうやって皆を消した？お前が、誘拐したのか？それとも…お前が……」

「殺したのかって？おいおい落木、お前そんな馬鹿じゃない。自分でも分かってるんだろ？今の世の中じゃ完全犯罪すら簡単じゃないってのに、それを何人もなんて現実から目を逸らすにしても下手くそだぜ」

こちらを小馬鹿にしたような笑みには腹が立つが、佐伯の言う通りではある。

そうだ、技術の進歩が止まらないこの時代で、足も付かず複数人を拐かすなど現実的では無い。

そも集団失踪自体が現実的では無いが、同じ非現実ならば幻想をこそ疑う。

「それは、そう、だが……」

「そうそう。落木に掃除を押し付けた牧原達はともかく、両親を二階にいる落木に気付かれずにどうにかするなんてまあ出来る事じゃないっての」

「……は？」

こいつは今、何を言った？

したり顔の笑みが深まる。

蝉の鳴き声が五月蠅い。

あまりの怒りに言葉が出てこない。

「お前今何て……え？は？お前が……え？」

分かっていた筈だった、疑っていた筈だった、問い質しに来た筈だった。  
だがそれでも、こうもあっさり観念するなどとは思ってもみなかったのだ。

「語彙力どうしたよ。分かってた筈だろ？こうやってオレを呼び出してオレが応えてる時点で、オレが元凶だって分かってた筈だ。いや、原因と思ってただけの可能性もあるか。ま、ここまで来れば馬鹿でも分かんたら」

相も変わらず、佐伯はニヤニヤと軽薄な笑みを浮かべている。  
ニヤニヤ、ニヤニヤ……ああ、腹が立つ。

「何でこんな事」

「落木が願ったんだろ？平穩に暮らせませうによって、平和に暮らせませうによって。ちゃんとなつたじゃねえかよ。学校は気分を害する輩が減ってちとマシになった。家庭状況だってそりゃもう悲惨な状態だったが、これで根本的に解決だ。万々歳じゃねえか」

「何が万々歳だ！俺はこんな事望んでない！願って！ないんだぞ！！」

激情に身を任せて、咆える。  
叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。  
佐伯の肩に乗せた膝に体重を掛けるように、何度も、何度も、何度も繰り返す。  
相応に痛みがあってもいい筈だが、佐伯の表情は薄ら寒い笑みが張り付いたまま。

「いいや願ったさ。口に出さなきゃ伝わらないだの、言霊だのって言葉もあるが、オレに言わせりゃ願いなんてもんは頭に浮かべただけで成立すんのさ。本気で一回も願わなかったのか？あいつらさえ居なければ、俺はもっと幸せだったのにな」

「黙れ……」

「普通の事だ。誰だって一回は考える事だよ。現状に満足せず、より良いものの可能性を夢想するのは霊長の証、人間の特権だ。ただまあ、そういうのは大抵もうどうにもならない過去か、どうしようもない未来ってのがよくある話だからな。オレはそういう出来ない事をどうにかして

やってるんだ。どうしてか罵倒されるばかりなんだが、寧ろ感謝して欲しい位だぜ」

「黙れ。喋るな」

笑っている、ニヤニヤ、ニヤニヤ、笑っている。

ペラペラと御託を並べて、余裕の表情でこちらを見上げていて、そのくせ視線は俺を見下しているのだ。

ああ、蟬の音が煩わしい、佐伯の声が臓腑が煮え滾る、腹が立つ、腹が立つ、腹が立つ、腹が立つ——

視界が怒りで真っ赤に染まる中、佐伯は遂に我慢ならない言葉を言った。

「落木だって本心では思ってるんだろ？——ああ、消えてくれて良かった、って」

——この、悪魔め！

そう俺が叫んだ瞬間、佐伯の顔が見た事も無い、しかし本来のものであろう笑みへと変わった。

それはこれまで見てきた中で最も醜悪な笑みで——

「……ああ、そうだよ。オレの勝ちだ、落木。これこそ悪魔の証明……ってな」

「黙れえええええええええ！！」

地面が冷たい。

気が付けば、耳障りだった声も、夏の騒音も掻き消え、世界はすっかり静謐に満ちていた。

また独り、天上の星々に見下ろされている。

望めば、願いは叶えられる。

なんて便利なんだろうと思う自分がある、きっと自由に使えるだけの心があれば楽に生きられただろう。

けれどももう分かり切っている——俺の心は消失に耐えられない。

「ああ……」

倫理と罪悪感に苛まれ、心が磨り減っていくのが自分でも分かる。

もう後戻りは出来ない、戻す術が無いという事を何となく理解していた。

それでも最後に願ったのは、そうしなければ壊れるとも理解していたからだ。

けれど……ああ、今にして思えばもっと簡単な方法があったじゃないか。

消したくなかった、消すべきではなかった、消えるべきではなかった、消えて欲しくはなかった。

——なら、本当に消えるべきは、きっと……………

—————

「……以上でホームルームを終わりとする。久し振りの授業になったがテストも近い。くれぐれも気を抜かないよう、真っ直ぐ帰宅するように」

教師の一声で空気が弛緩し、クラスメイトが一斉に立ち上がる。

久しぶりの学校だけど今日は部活動も禁止されているので、僕も今日は大人しく帰路に就こうと机の横に掛けた鞆を取ろうとして……隣の空席が視界に入った。

「落木くん……」

一週間前、落木くんが家族と共に行方不明になった。

二週間前の集団失踪から日が浅い事もある、周辺の学校は一斉休校、外出は禁止され警察が大規模な捜索を行ったが、今も具体的な情報は公表されていない。

それが夜逃げだったのか、誘拐されたのか……死んでしまったのか、牧原くんと同じでついぞ分からないまま。

自分の意志だったなら、まだ良い、迫られた選択肢から選んだ結果であるのなら、まだ。

けれど意思すら尊重されずに未来が歪められたのなら、それは許されない事だ。

何とかしてあげたいという気持ちはあるけれど、もう僕にどうにか出来る問題ではなく、警察の成果を待つしかない。

——また明日と、そう言ってくれたのに。

「……いけないいけない。今日は早く帰らないと」

雑念を落とすように頭を振り、僕は鞆に教科書を詰めていく。

まだ集団失踪の原因がはっきりしていない以上、僕も注意して帰宅しなければならない。

悲しい気持ちはある、けれどそうやって惜しめるのも命あつての物種なのだから。

「……………？」

と、ふと、机に影が差す。

まだ誰か教室に残っていたのか、そう思って顔を上げる。  
僕と目が合ったその生徒は、ニヤリと唇を割いて、こう嘯いた。

――なあ、悪魔って信じるか？と。

2025 9/13 14989 字